昭和二十八年二月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可

慈光

（通第四十七号）
第二號・第五卷

目次

弥陀の智慧をたまはりて……花田正夫（1）
大無量壽経講話……福島政雄（7）
隨想断片……聚墨生（11）

彌陀の智慧をたまはりて

花田正夫

歎異抄の十六章に「一向專修のひとにをいては、廻心といふこと、ただひとたびあるべし。その廻心は、日ごろ本願他力真宗をしらざるひと、彌陀の智慧をたまはりて、日ごろのこころにては往生かなふべからずとおもひて、もとのこころをひきかへて、本願をたのみまいらするをこそ、廻心とはまうしさふらへ」とあります。ここは非常に大切なところでありますから、池山栄吉先生の意訳文を引用いたしませう。

「ひとすぢに、他力の本願をたのんで、ただ念佛する人の上には、廻心といふことは、生涯に、ただ一遍しかない筈である。そんならその廻心とは、一体どんなことをいふのかといへば、ふだん他力攝生の本願をのべたまふ、真実の教をわきまへない人が、彌陀佛日の、智慧の光明をいただいて、無明長夜の闇がはれわたると共に、これまでのやうな、わがはからひがもととなつてゐる心では、おたすけにあづかることは出来ないと眼がさめて、もとの心を向けかへて、本願に打ちすがる。これを廻心とは、いふのである」

とくだいて懇切に述べてあります。念佛行者の一生一度の廻心であります。修諸功德の十九願、植諸德本の二十願、さうした善巧方便の誓願に哺み育てられて、無限の転入を終へて、弘願他力の十八願に攝め取られる、即ち三願転入の成就せられる風光であります。「本願他力真宗を知らざるひと」と本文にありますが、真実の教は我等凡夫の千慮萬慮頭燃をはらふやうに努めても、信ぜられるものではありません。唯「彌陀の智慧をたまはる」といふことの外には廻心は成就いたしませぬ。

教行信証の信卷の初めに

「然るに常沒の凡愚、流転の群生、無上妙果の成じ難きにはあらず。真実の信樂実に獲ること難し。何を以ての故に、いまし如来の加威力に由るが故に、博く大悲広慧力に因るが故なり。たまたま淨信を獲ば、是の心顚倒せず、是の心虛偽ならず、是を以て、極悪深重の衆生、大慶喜心を得、諸の聖尊の重愛を獲るなり」

と示されて、『凡夫が佛果を得させて頂くことは容易なことである、獅子が鹿の子を倒すより易いことである。然

し難の中の難は、真実の信樂を獲るといふことである。これは求める者の力でも、説く人の力でも、人間の力では全く不可能と申すほかはない。ただ彌陀佛の不思議な威力を加へて頂き、広大無辺の智慧を大悲にめぐまれて、始めて清淨な大信心を獲させて下さるのである。ひとたびこの信心がひらかれると、最早顚倒したり虛しくなるといふことはない。さういふわけであるから、頂いた佛智に照されて、成る程極悪深重の身であつた、この者をこそ隣れみ悲しんで下さる大慈大悲の本願でましましたかと、慚愧と感謝に悲泣雨涙させられるをきざみとして、十方の諸佛や諸菩薩から重愛を被り、大聖世尊は「我が親友なり」と仰せ下さるのである』と歎ぜられてありますが、この「如来の加威力、大悲広慧力」と申されるのが「彌陀の智慧」であります。

蓮如上人は「佛法者には法の威力にてなるなり、法の威力なくばなるべかなず」とお諭し下さつてありますがこれも今の聖人のおこころをお述べ下さつたところであります。

「彌陀佛日の智慧の光明をいただいて、無明長夜の闇がはれわたる」と池山先生は意訳してら居れますが、これは大変な出来事であります。文類正信偈の中に「信知するに日月の光益に超えたり。必ず無上淨信の曉に至りぬれば、三有生死の雲晴れ、清淨無碍の光曜ほがらかにして、一如法界の眞身あらはる。信をおこして称名すれば、光攝護したまふ。亦現生に無量の德を獲しむ。無辺、難思の光、不断にして、更に時処諸縁をへだつることなし。諸佛の護念まことに疑ひなし、十方同じく称讃し悅可す」とあるのがこの風光であります。それは恰も東の空から日輪が出るのと同様であります。一度東天に日輪が光明を放つと、夜の闇は自然に消されて、夜の間大切にしてゐた電灯や洋灯や提灯が、一切その光を奪はれて行きます。彌陀佛の智慧の光明が、一度私共の無明煩悩の心底に徹到して下さると、善し悪しとか、智とか愚とか、邪とか正とか、是とか非とか云つて、自分の力を根本として、無限にはからひ続けて居りました一切の灯火が、大悲無障の大光明の威神力に。すべて無力化されてしまふのであります。そこに逆謗の死骸として、一文不知の愚者、一生造悪の悪人の自己が照し出され、それと共に、今迄提灯でも電灯でも照らし出すことの出来なかつた富士山の全貌も、見はるかす大海原も、野原も河川も、一望千里、大光明下に照らし出されるのであります。そこに行くも帰るも、進むも退くも、唯一、太陽の光照をたのんで、道が自然にひらかれて来るのであります。冥加、冥見の遠く遙かな世界がひらかれ、斯くて愚者が卑屈の垢を洗はれ、悪人がひがみの塵を払はれ、智者が慢心を碎かれ、善人が憍心を破られて、老少善悪のひとびとが一味にとけて、やはらぎやすらうて、天下和順、日月晴

明の徳光が射しそめるのであります。愚鈍の周利槃得も、婬女蓮華色比丘尼も、千人殺しの指鬘外道も、神通第一の目連、智慧第一の舎利弗と肩をならべて、佛心に融け、佛智に潤うて、無上に莊嚴せられ、不滅の名を天地に刻して、莞爾として「ここに大道あり」と身をもつて教へて居ります。

無明長夜の灯炬なり　智眼くらしと悲しむな
生死大海の船筏なり　罪障重しと歎かざれ
願力無窮にましませば　罪業深重もおもからず
佛智無辺にましませば　散乱放逸もすてられず

聖人の信眼に映ずる佛智、佛智佛徳の讃仰随喜の徳音であります。「煩悩に覆はれて智眼とこしなへに閉ぢ無明の長夜に永劫の流転を定めとした身に照々乎として、大灯炬ましまします。久遠劫来の罪障の重圧にあえいで生死のはてしない苦海に永恒の沈淪のほかない身に、大悲大願の大船筏ましまします。何たる幸慶、何たる慈恩であらうか。我身の罪業深重の故にこそ、無窮の願力がましまします。我身の散乱放逸の故にこそ、無辺の佛智がましまします。」との御自らの無限の懺悔と無量の慶讃と、我等凡愚底下の者への切々衷々たる悲引の和讃であります。

大無量寿経の東方偈、即ち西方の淨土にこの東方の娑婆世界から往生する姿を説かれてゐる偈文に

「慧日世間を照らし、生死の雲を消除す」

とあります。これも私共が彌陀佛の智慧をたまはつて、無明の闇が破られ、生死の迷雲が消除されて行く、西方白道の旅の風光であります。

愚者のすくひ

もとより佛心の光明は、老少善悪のひとをえらばれません。山の頂をも照せば、谷の底までも照らす太陽の如くであります。世尊の悲心は、智者舎利弗の頂にも輝き、愚者周利槃得（シュリハンドク）の心底をも照らし、大德大迦葉も随喜すれば、悪逆の阿闍世王もひとしく讃仰して居ります。

然し涅槃経にありますやうに、七人の子供をもつ親の心は、子の一人一人に対して平等ではありますが、若しそのうち一人が病みますと、親の心はひとへに病む子の上に注がれることであります。水に溺れる者を救ふ時に、泳ぎの出来る人はあとにして、泳ぎの出来ぬ者をさきに引き上げるのは、情の自然であり、理の当然であります。私はここに愚者悪人の上に佛慈ひとへに重きを感泣し、私共の愚鈍さの代表として、周利槃得のすくひに就いて述べませう。

槃得は、印度の四姓中、最高の階級であるバラモンの家に生れ、兄を摩柯槃得と申しました。兄は賢明でバラモン教にも通じ、弟子も多く、論議問答も巧みでありましたが、弟

の槃得は愚鈍で、あらゆる人々の嘲罵と愍笑のまとでありました。

或日のこと、佛弟子舎利弗と目連が城内に帰つて来ましたので、沢山の人々が両尊者を欽び迎へました。それが機縁となり兄の摩柯槃得は遂に佛弟子となり、愚鈍ながらも弟の槃得も佛弟子に加はりました。佛陀の教團では、或は寂かに禪定に入り、或は法文を誦して法味を愛樂して居りました。弟の槃得も短い偈文を兄から興へられて、それを暗じようと、はたで見る目も痛ましい程努力いたしましたが、愚鈍の性の悲しさには、どうしても暗誦が出来ません。槃得が毎日繰り返す偈文を聞いた牛飼の牧童でさへ先に暗誦してゐるのに槃得には不可能なのです。牧童がかへつて槃得に教へると言ふ始末でした。さう言ふ風でありますから教團の内外から非常な非難と嘲笑と悪罵の声が槃得の一身に集りました。兄は遂にたまりかねて弟の槃得を呼び「お前の様な愚者は佛法の器でない。今日を限り出て行け」と強く叱責して祇園精舎の門前に追ひ出しました。

身の愚鈍さのために、地上に唯一の力と頼む兄からも叱責せられて、精舎の外に追ひ出された槃得は、それかと言つて家に帰つて家業を継ぐ術も知らず、門前にひとりたたずんで「どうせうぞいの！どうせうぞいの！」と泣き叫び、うろつくほかはありませんでした。道行く人々はこの憐れな姿を眺めても、槃得の愚鈍さにあきれて、誰れ一人として優しく慰めてくれる者もなく、かへり見てはさげすみの眼を投げかけるばかりでした。

時しも靜かに禪定に入つて居られた佛陀の御耳に、はらわたを断つ悲痛なうなり声「どうせうぞいの！」の槃得の歎きが聞えて来ました。佛陀はやをら禪定から出られて、靜かに精舎の門前に歩みよられました。槃得は悲歎に沈んでゐましたが、ふと自分に近づくものの氣配を知つて、そちらを見ると、そこに慈容あたりを照らし給ふ世尊が立ち給うてゐられました。先づ身の居ずまゐをたゞし、世尊に向ひ奉つて合掌し恭敬して再びそこにうづくまりました。

すべてを知ろし召し給ふ佛陀は、しばし槃得を眺めて居られたが、やがて金口はほころびて御優しい声で、

「槃得よ、歎くことはいらない。

愚者が愚者としるのが正しい智慧である。

愚者であるのに賢者と思うてゐるのが、真実の愚者である」

と告げ給うた。愚鈍な槃得のために佛陀は何回となく、この一句を繰り返されたことでありませう。佛陀の金口から慈雨の如く降り注がれる悲語を、全身心を挙げて聞く槃得の胸中に私の心も沈潜せしめられるのであります。槃得は今まで「どうせうぞいの！」と歎いてゐた、その歎きは

痛烈はらわたを断つものがある、然し「どうせうぞいの！」と叫ぶうちには、すこしは何とかなれるだらうと、言ふ慢心がひそんでゐる、「私はどうにもなりません、困つた奴です」といふ声を聞きますが、この言葉の表面は謙虚でありますが、ほんとうにどうにもならぬとなれば投げ出す外はありません、それなのに「困つた奴」と言つてゐる所に、何時かはどうにかなれるだらうと言ふ予想と可能の慢心が纏綿としてこびり着いてゐるのであります。そこに愚鈍な槃得ながら、愚鈍さに徹し切れない、否むしろ真の愚鈍なればこそいよいよそれに徹することが出来ぬのであります。これが佛陀の御目には「愚者であるのに賢者と思うてゐる」と映るのであります。「内は愚にして、外は賢」なる姿こそ、真に我々の愚鈍な正体であります。私共が自分の力でそこをのぞくと、自滅の暗黒で、身の毛もよだつばかりであります。唯ひとりその自滅の暗黒をそのままわがこととして自覚せしめて下さるのは、その愚鈍さを見抜かれて、無限の大悲をもつて攝め取つて下さる佛の広大無辺な御心があればこそであります。冷厳なさばきの風の吹きまくる世間では、金輪際そこまで裸になれないのであります。

槃得の頑迷な心も、佛陀の大悲にほころびて、始めて、真実の愚者でありましたと、愚に帰らされたのであります。

槃得の眼は驚きに輝き始めました。「愚者が智慧者となるのが佛道ではなかつた、愚者が愚者に帰る、そこに正しい佛の御智慧がましましたのか」槃得の悲涙は無限のよろこびの涙に転じて行きました。

世尊は槃得の暗黒の胸中に一点の光の点ぜられ、驚きの瞳のかがやきを見出されて

「槃得よ、今日から法文を覚えなくてもよい。箒木を持つて精舎の庭を掃除しながら、塵を払はん、垢を除かん、と繰り返して唱へよ」

と仰せられて、再び精舎に帰り給うた。槃得は其の日から「塵を払はん垢を除かん」と唱へながら箒木を終日手にして、広い精舎の内外を掃除し続けた。然し愚者槃得の薪木に一度点ぜられた佛智の火は焔々と燃えて、槃得の心に行き渡つて、塵とは何か、垢とは何か、これは愚鈍な身の常に流す、愚痴と卑屈といかりの塵であり悩煩の垢である。払はん、除かん、とは、すでに正覚のさとりを極め給うた佛陀が、昼夜に無限に精進して下さる大慈大悲の御心であると、日ならずして柯得の胸に、佛心の蓮華は鮮やかに開いた。天を仰ぎ地に伏して槃得は合掌随喜したことでありませう。

兄の摩柯得は、それとも知らないで、弟の槃得が未だに精舎に残つて、一本の箒木を持ちながら一日中何やらつぶやき続けてゐると同輩から聞かされ、再び大叱責しようと槃得に近づいて見ると、弟の顔容や対度に、卑屈の垢は洗ひ

去られて、盤石の靜けさを獲てゐるのを見出し、驚異のあまり

「槃得、汝はすでに道を成ぜりや」

と眼を見張つてたづねました。槃得は莞爾と微笑みながら、事の次第を述べ「あなたの大叱責があればこそでしたと随喜し、兄と弟とは永遠のひかりのなかに涙と共に融けて行つたことでありませう。

然し教團の内外の人達は矢張り槃得をさげすみ、外道のバラモンの人達は「佛陀の教は幽玄であるといふが、愚鈍な槃得が悟るのであるから浅く狭いものだ」といふ風に誹謗の材料にしました。然しそれらの誹謗はいよいよ槃得の信念を増上するばかりでありました。

佛陀は或日、槃得に命ぜられて、沢山の比丘尼達に説法させられました。比丘尼達は嘲笑と好奇心で初めは聞いて居りましたが、一本の箒木を手にした槃得の訥弁の雄弁に心打たれ、一言一句、そのまま法に適うた大説法に、慚愧と讃仰の涙にくれました。

佛法外獲の人達も、何時しか槃得の徳力に敬伏し、やがて舎利弗目連の大弟子とならんで賞讃するやうになりました

蓬如上人の御一代聞書に

「信治定の人は、誰によらず、先づ見れば、すなはち尊くなり候。これその人の尊きにあらず、佛智をえられるが故なれば、いよいよ佛智の有難きほどを存ずべき事なり」

と念佛者を讃仰して居られます。「誰によらず」とは、身分の貴賤とか、学問の有無とか年齢の老少とかいふへだてのないことであります。梅干と聞くとすつぱくなるやうに、何処となく尊い香りが見えるのであります。然しそれも、その人の力ではなく、佛智をたまはる自然の徳でありますから、いよいよ頂いた佛智を有難く仰ぐばかりであります。

無慚無愧のこの身にて、まことの心はなけれども彌陀廻向の御名なれば功徳は十方にみちたまふ」と聖人が信嘗下さるのも、それと同じこころであります。佛智が即ち名号であり念佛であります。「智慧の念佛うることは法藏願力のなせるなり」とありますのが、名号が即ち智慧と申されたところであります。我身が尊いのではありません、我身は飽迄もまことの心の無い無慚無愧の逆謗の死骸であります。御廻向の名号、すなはち佛智によつては枯木に花のよろこびがひらくのであります。

さて佛智をたまはる近道は、佛智を頂いてゐる信治定の人に法を聞くことが大切であります。蓮如上人はそこを、我が御身にかけて「人に佛法の事を申してよろこばれば、われはその悦ぶ人よりもなほたふとく思ふべきなり。佛智をつたへ申すによりて、かやうに存ぜられ候事と思ひて、佛智の御方を有難く存ずべしとの義に候」

とも仰せられ、また信徳を讃へられて

「佛法をば学匠物しりはいひたてず、ただ一文不知の身も、信ある人は、佛智を加へらるる故に、佛力にて候間、人が信をとるなり。ただなにしらねども、信心定得の人は、佛よりいはせらるる間、人が信をとるとの仰に候」と述べられてあります。兎角私共は姿形にとらへられて、徒らに学匠物しりを尊ぶのでは聞法の障りになります。真の念佛者は学問のあるなしを問はず、佛智によつて一文不知の愚者に帰らされて居る人であります。一生造悪の悪人と自照して居られる人であります。それでありますから、僧俗にとらへられず、貴賤にかかつらはず、信治定の人について何処までも聞法することが大切であります。そこに佛智をたまはる道がひらけることであります。

秩父宮御逝去の日、誌す

大無量壽經講話

福島政雄

今日から大無量寿経に就てお話いたします。私がこの経に親しみ始めましてから三十年以上になります。何時も申上げます通り、私の二十六歳の夏から、はつきりと親鸞聖人の道に転じまして、二十七歳の三月十一日の夜、この大経の悲化段、五悪段、ことに第五の悪を読みまして非常に心をうたれ、私自身のことを言はれてあると感じました。この時が私といたしましては大経にしみじみとうたれた始めであります。

其後数年経ちますうちに、僅か半年の間に、長女が四才で死に、妹が二十五才で死に、次いで母が五十五才で死にまして、悲化段の始めの、この世の無常な有様を説かれてあります言葉「人世間愛欲の中に在りて独生し独死し独去り独来る。行くに当りては苦樂の地に至趣す、身自らこれに当る、代る者有ること無し」などのお言葉に打たれるやうになりました。斯様にこの経への私の親しみ始めの數年の間は、悲化段とか、五悪段のある下巻の中に自分の姿を発見して、人生の姿と云うものを教へられました。

それからずうと年日を経まして、私の五十三歳の春に、

満州の建国大学に赴任いたしました。ところが大学生で、たしか四人ばかりの青年が、念佛に御縁の深い青年でありまして、大経の話をして呉れと申し出ました。満州に参ります時には、そんな積りはありませんでしたが、青年に言はれてその心になりまして、始めは新京の本願寺別院を借り、のちには私の官舎の二部屋を打ち拔いて話をいたしました。集る青年は十人位でありましたが、話を續けまして二年位になりました。その時の話は、大経を飛び飛びにお話いたしまして、大経の上巻を経り、下巻の始めまでいきました。聽いて呉れました青年にはどうであつたか知りませんが、私自身には非常にためになりました。四十八願といふものに我身をいれて行く、或は四十八願を我身に頂くと言ふ一歩に入り得まして、これから上巻に親しみが出て参りました。

その後京都に移りまして、滋賀県の方で御縁を作つて頂きまして、大経の始めから再び話をいたしまして、兎に角、續けに続けまして、大経上下二巻を一通り話終りまして、滋賀県で私の念願が成就いたしました。この時の御縁で、釈尊の「光顔巍巍として威神極りなくまします」といふ御姿が、非常に私の心にせまる味が出来て参りました。

かうして段々にこの経に親しんで参りました。始めは下巻から、次に上巻、それからまた下巻と云ふ風に味つて参りました。若し八万四千の経典の中で、たつた一つ持ち得ると致しますれば、大経を持つと言ふやうに我身にうけるものが出来ました。

大乘経典の中での大経の位置に就て、金子師は「大経を中心に置いて、右に華厳経、左に涅槃経といふ配置になる。今日の我々としては、大経と華厳経と涅槃経が味へたらよい」と云はれたことがあります。私は華厳経は或部分を素読いたしましたが、涅槃経は、教行信証に聖人が引用されたものを拾ひ読みしただけで、未だ通読は出来てゐませんが、近角先生から承りましたところによりますと、「大経は華厳経のエキスを採つたものである。大経の始めに、華厳三昧と云ふことを説かれてゐる」と教へられました。成る程、華厳経は釈尊が三昧に入られたきりで、徹頭徹尾、菩薩方の説法が現れて居ります。大経を読みましても、釈尊が三昧に入られまして、法華経などのやうに、それから立つて法を説かれるのではなく、三昧に入りきりの釈尊、その世界のなりで、始めは阿難、後には彌勒との対話が大経でありまして、つまり沈黙の中に対話が現れてゐるのであります。つまり光顔巍巍たる釈尊の御姿を仰いだだけで、大経の問答が、みなこもつてゐるのであります。それはもとより、鋭い感覺で見えるのであります。かうしたところから、大経は華厳経のエキスを述べられたものと感ぜられます。

私としましては、今日を始めに、又大経の話をさせて頂くのでありますが、皆様にはどうなりますことか知りませんが、私としては有難くうれしいことであります。

私は大経の御講義を、大分前、たしか昭和十二、三年の頃、比叡山で夏に、臼杵祖山先生から、二夏に亘つて、うかがひました。祖山先生は何時も静かな静かなお話をされる方でありますが、大経の御講義の最初の夏は、何とも云へぬ熱烈なお話でありまして、先生が涙を流されての熱で話されました。私はそこで、先生にもかうした一面があるのかと驚いたことでありますが、さうしたことも、今思ひ浮べられます。

これからお経の本文に入りまして申し上げます。経の一番始めに「我聞如是」とあります。「我聞」とは聞の心持であり、「如是」とは信の心持であります。

次に「一時佛・住・耆・闍崛山中、與大比丘衆、萬二千人俱」とありますが、「一時」とは説かれる時をあらはし、「佛」とはお説きになる主人公であります。

以上を六事成就と申しまして、どの経典にも大切なこととされて居ります。即ち、聞・信・時・主・所・衆の六つであります

経の始めに「我聞如是」とありますのは、我見を雑じえないで聞くことの大切さを、阿難尊者が身を以て教へて下さるのであります。すなほに佛説を聞く、聞即信が大切なことと承つて居ります。

「一時」とは普通には或時でありますが、私が始めて、法隆寺で佐伯定胤貌下から直接承りました所では「機教相應の時」と教へられました。聞かうといふ人の心のはずみと、説いて下さる佛の御心とがピタリとあふ時であると教へられまして、これは大事な意味の深いことと知らされました。聞かうと言ふ心のはずみになつてゐる時、説き手の心がピタリとあふ、そこに聞く私に、佛の教が生命に触れてくるのであります。これが機教相応の時であります。

「佛」は釈尊であります。

「所」は霊鷲山であります。

「大比丘衆、萬二千人俱」とは沢山の人々と受けとつてよろしいと思ひます。

「一切大聖、神通已達」は、この人達は皆残らず、大いなる聖者といはれる方々で、神通力をそなへた方々であります。

次に御弟子を連ねて挙げられてありますが、その一人一人が、釈尊と深い関係があり、面白い話もありますが略しておきます。さうした釈尊の重な御弟子の名を連ねられてあります。

次に大乗の菩薩、普賢や彌勒などの菩薩の名がならべられてあります。さて一体お経に説かれてゐる菩薩とは、どんな方であらうか、菩薩は歴史上に存在する人の名であらうか、或はもうすこし異る意味があるのであらうか、これは問題であります。

実在する人であると解する人もありますが、私は祖山先生からうかがつたのが本当だと思ひます。祖山先生を教では、菩薩とは、佛様の御心なり、お生命なりが、我々衆生にひびいてくるおもむき、我々にひらめいてくるおもむきを、種々の方面から表現されたものである、とのことであります。

普賢菩薩とは佛の智慧が我々にひらめいて下さる方であり、観世音菩薩は佛の慈悲が我々にひらめいて下さる方であり、慈氏菩薩、即ち彌勒菩薩は永遠の未来の問題について我々に佛がある心のひらめきを與へて下さる、それを拝む心が彌勒菩薩を拝む心であります。これも祖山先生の言葉でありますが、私もその通りと思ひます。

それで種々な菩薩方がここに連ねられてありますが、それは佛弟子達の生命に、釈尊のいのちのひらめきが、種々の姿種々の趣に感ぜられた、その重なものをならべてあると受け取られます。

一体、私共が大経を拝読する時、私共は大経の会坐の何処に居ることでせうか。私共も大経の会坐の末坐に加つて居るのであります。釈尊が法をお説きになつて居られる。末世でありますが、私共も釈尊の会坐に集ひ、お言葉を聞き、大弟子方と共に、佛陀の種々の生命のひらめきを私共もうけて参るのであります。

それはどう云ふ位にあつて連つてゐるか、舎利弗や目連が上上の人とすれば、私共は下の下の、又下に坐つてゐる、いやそれにも入りかねると思ひますが、釈尊の御心を申せば「説聽同位」と云つて、説かれる釈尊と、聞く私共と同じ位にあると、佛は認められて説き給ふのであります。説聽同位であると佛の御目にうつつてゐるのであります。私共にはさう云ふことは、言ふことも思ふことも出来ないのでありますが、釈尊の御目には、末世の凡夫と雖も、如何に煩悩深くとも、佛の位に入れしめずばおかじ、必ず入れしめる、との御心で説かれてゐるのであります。

菩薩方をならべられた後に、菩薩方の徳を讃歎せられてあります。この讃歎は、私共凡夫がつまりはこの徳に必ず入らしめられるのであります、そこを述べられて居ります。

この菩薩の徳を讃歎された経文の終り近くに、菩薩は「不請の法を以て・諸々の黎庶に施すこと、純孝の子の父母を愛敬するが如し。諸の衆生に於て視ること自己の如くす」とありますが、祖山先生がこれを非常に讃歎せられました。つまり孝行な息子が親に仕へるやうな態度で菩薩方が末世の煩悩の衆生に奉仕して下さるといふ意味であります。

これは非常に有難度いことであります。丁度世の母親、世の中のお母さんを見ると、子供の小さい時、足を洗うてやるばかりでなく、大きくなつても、散歩でもして子供が帰ると湯をとつて足を洗つてやります。これが世の母の姿であります。斯う云う親の心が子に徹して純孝の子が生れるのでありますが、菩薩は衆生に対して、この純孝の子が親を敬ひつかへるが如くに、種々と奉仕して下さるのであります。

これにつきまして、キリスト教の方でありますが、聖書を読みますと、キリストは弟子達の足を洗つて居ります。ところが宗教の革新を叫びましたマルチン・ルツテルの大論文を昨年読んで居りますと、その中にローマ法王を盛んに攻撃して居りまして「キリストは弟子達の足を洗つてゐるが、その教をうけつぐローマ法王は、ローマ法王庁に詣でる人々に自分の足を接吻させてゐる、これは真のキリストの心ではない」と述べて居ります。キリストは斯くの如く立派な行をしたのでありますが、この菩薩の徳を味ひますと、キリスト以上、キリストよりもう一歩無我の立場でありませう。

聖徳太子が勝鬘経義疏の中に、菩薩の八地以上の徳を述べられて「衆流に冥合して更に異趣なし」即ち諸の煩悩の流に、菩薩は入つてしまつて、俺は菩薩だぞといふ所が微塵もない。煩悩の流に菩薩の身を全く投げ入れてゐると太子は讃仰されてゐます。この菩薩の徳を考へて種々と味ひますと、菩薩は自分は上の段にあるけれども、衆生のために、仮りにこれだけしてやると言ふことはなく、すつかり衆生と一つとなつて、孝子の親に仕へる如くに、衆生につかへて下さるのであります。これは佛の生命のひらめきでありますから、釈尊の御心が一切無我で、一切衆生に奉仕される心であります。この点キリストより深い、ぬけたところがあると思ひます。

聚墨生

光が斜に射しこんで来て、全身に光を浴びたので驚いて目を開いた。その時フト氣がつくと、私の眼鏡に白いほこりを開いた。

隨想斷片

雲の多い或日の午後である。私は読書に疲れて、そのまま座敷に横になつてしばらく目を閉ぢてゐた。すると急に陽がいつぱいあるのがアリアリと見えた。われながらあまりにも汚れてゐるのにあきれて眼鏡をふきながら思つた。

法然聖人が「念佛を信ぜん人は、たとひ一代の法をよくよく学すとも、一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無智のともがらに同じて、智者の振舞をせずして、唯一向に念佛すべし」と一枚起請文に勧められてあるが、「一文不知の愚鈍」といふことは、佛智の直射を被る外に知れやうのない、大変な境界であると知らされた。

自分は無学であるとか、学問はしてゐますが一向に駄目ですといふ風なことではない、学問の有無とか、生れつきの賢愚といふことでもない、さうした心の奥、心の底の愚鈍さが佛智の光明に照らし出される時、唯愕然とするほかはない、それが念佛者の正しい姿であると知らされ、佛智の有難さをしみじみと感じさせて貰うた。

○

孔夫子は「天爵あり人爵あり」と教へて、「人爵だけを喜ぶ人とは、未だ共に道を語るに足らない」と弟子を誡めてゐる。

私は孔夫子の説かれる天爵の境界を知らないが、念佛者に世尊は「我が親しき友なり」と仰せられ、更に「観音菩薩も勢至菩薩も勝友となる」と説かれ、なほまた念佛者を「好人、妙好人、稀有人、最勝人、広大勝解者、人中の芬陀利華」とまで讃えて下さつてゐる。これは空文字でも空手形でもない、もとより人間が人間に與へる人爵でもない。まさしく佛爵である。

然し私の心身の動きを省みる、と常に人爵を喜んで、佛爵を空文字にしか思つてゐない、誠にあきれ果てた奴である。斯るあさましい盲目者だから、佛はことに憐んで、かくも沢山の佛爵を下さるのであらうか。

○

冥見をおそれよ、冥加を尊べ、とは連如上人が常に仰せられたお言葉である。然し私は自分勝手な解釈をして、あれは上人がお若い時から御苦労なされたからであらう位に思ひこんで、一向に省みようとしなかつた。

ところが最近になつて、この御言葉は無限に深く尊いことだと知らされ始めた。それは生れ出た嬰児は目も見えず物も言へない。然しこの嬰児を父と母とは四六時中護りつづける。それは嬰児には永遠にわからぬ世界の出来事であらうが、厳然とした事実である。恰も私が佛とも法とも知らぬ、遠くはるかな時から、常に護り、常に憐み、私と微塵も離れ給はぬ久遠の御親がましまして、冥見と冥加を加えて下されたことも、動かすことの出来ぬ厳然とした事実であると、念佛のひかりに照し出されて来る。

猿の浅智慧といふが、私自身がその通りである、私には現れた表面のことしか見えぬ。念佛が出るとか出ぬとか、よろこべるとかよろこべぬと言うて、さう言ふことばかり問題にしてゐるが、さういふ心さへもおこらなかつた久遠却来の御心労といふものは如何ばかりであつたらうか。「彌陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば」と聖人が常に仰せ下さつたのも、斯る深遠にして広大無辺の御心労を深く

感ぜられたからである。

○

お寺などで聽聞して居られる人を見ると、大低坐席がきまつてゐる。広い本堂であるから何処へ坐つてもよいのだが、誰はあそこ、彼はここと、極く特別の場合以外には変りがない。

岐阜の鵜匠の話をきくと、鵜が船べりにとまるのに必ず順序がきまつてゐる、若し間違つたとまり方をする鵜があると非常に他の鵜から苦しめられるさうである。

人間も鳥類も、きびしい無形の業にしばられてゐることをいよいよ知らされる。聖人が「兎の毛、羊の毛のさきにゐる塵ばかりも、作る罪の宿業にあらずといふことあることなしとまさにしるべし」と仰せ下されたのは、如何ともすることの出来ない、無意識下にそみついてその根源の遠く遙かに私を動かし縛る無限の業因業果の姿を、明らかに知悉し給うて、御心におさめとつて下さる、同心大悲の御心である。

世間に極く僅かであるが苦労人といはれる人々がある。有為転変の人生に処して、あらゆる苦労に負けずひがまずいよいよ磨かれて円満な人格を得られた人々である。私のやうな我儘な世間知らずと違つて、その人のせられることはよく世情に通じ、進退にそつがない、そしてあらゆる人々の立場や性格をよく理解出来る人々である。斯うした人の存在は世間を照し温める燈火、一隅を照らす光である、誠に尊い存在である。

然し聖人の「善悪の宿業を心得よ」と仰せられるのは、人間の持つた経験や智識を積み重ねて得られる世界ではない。超常識、超経験の世界である、それは信心の智慧、智慧の念佛によつてのみうなづかれる世界である。常識には底がある、経験には限度がある。さうした底を破り、さうした限度を超えた、換言すれば健全な常識の世界が、無得の佛智からひらかれて来るのである。前者が一隅を照す燈火とすれば、聖人のそれは世界を照す太陽の存在である。

○

歳末の日であつた。善導大師の浄土法事讃を拜読してゐた。上卷の終りに地獄経を引用されて、言語に絶する地獄の苦相を説かれてゐる。火に焼かれ、鉄叉にえぐられ、ずたずたに身を切りきざまれる姿は痛烈悲惨そのものである。然し一字一字を辿つてゐると或地獄で長い間苦を受けた罪人が、苦の中にあつて美しい景色を夢みる、すると地獄の東門が開いて、そこに何とも言へぬ美しい景色が見える、罪人はやれうれしと門を逼ひ出すと、赤い花と見たのは灼熱された鉄板であり、緑の木に登らうとすると鉄丸が降る。そこでまた長い間苦をうけて、今度は西の門が開く、見るとそこには紅葉したたる美しい風景が映る。今度こそは多年の願がかなつたとやうやくに逼ひ出すと、紅葉と見たのは全面の火焔である、地の草は皆刀葉である、ここでも亦長い苦をうけ、生命絶えたかと思ふと亦蘇り新しい苦を受ける。南の門、北門も亦同様である。

じつと読み続ける私に氣づかされることは、これは私共

の理想の美しい夢をひつきりなしに追うて、常に苦から苦を繰り返してゐる姿が、そのまま地獄の様相であるということである。

然し愚かで鈍い私共は、それを厭ひ、それを離れようとはすこしも思はないで、苦悩が多ければ多い程、いよいよ楽を夢みてやまない。ここにうじ虫はうじ虫の世界でそれをつづけ、猫は猫の世界でそれを続けている。そしてその苦海から脱しやうとはしないのだ。

大師はここに「かかる地獄の様相を如実に感じ給ふのは声聞や菩薩でもなく、独り佛のみしろし召す世界である」と述べられてゐる。

私はこの大師の御言葉で電氣にふれたやうに知らされたのは、穢土に住む者は穢土としれない、狂人が狂人の自覚がないと同じである。して見れば、身をずたずたに切られ、劫火に身を焼かれ、鉄叉にさいなまされて下さるのは、現に苦から苦、闇から闇に永劫の流転をして居る私をみそなはす、佛陀の御心中であつたのか、といふことである。

地獄の苦悩とは、佛陀の大悲の御涙にのみうつる、我等の苦相である。頻死の子を見る親心の、居ても立つても居られない、焼かれ切られる心、それが佛眼において感じて下さる地獄相である。

○

地獄はこはい、地獄にはおちてはならぬとよく世間で言ふけれども、それは地獄といふ言葉を聞き、或は地獄の絵を見て、それから妄想を描いて地獄を想像して、それを怖れてゐるにすぎない。

地獄とは佛眼にのみ映る苦相であり、佛心においてのみ感知して下さる底のない苦痛である。

諸苦毒中、我行精進、忍終不悔、とは我等の三毒の煩悩に狂ふ中に入りこんで、いたみ悲しみ、憐んでやみ給ふことなき法藏菩薩の御心労である。

信仰體驗錄の再版

私が安波勵八先生の本書を手にいたしましたのは十二年前京都の古本屋でありました。身も吸ひつけられるやうにして数日の間肌身離さず讀みました。そして心底にほのぼのとした温みと光を感じ、爾來有縁の方々にお勧め申して居りました。

安波先生は東大の医学部を卒業され不思議な御縁から近角先生の教をうけられ、郷里の別府で開業されてのちは東陽和上の法縁を得られて、遂に信心の開発せられた方でありますが、其後胃癌でなくなられたのであります。その死の宣告をうけられて後に、二篇を誌されてあります。念仏者の有態のままを綴り残された不朽の書であります。是非皆様も坐右におかれまして繰り返し御讀み下さる様お勧めいたします。二月頃再版の予定であります。

出版所	京都市左京区高野泉町四〇。香華書店
	振替 京都 一二一五番。
定價	二五〇円。 〒一六円。

編集後記

長い御療養の甲斐もなく淋しく逝かれました秩父宮を謹しんでお悼み申上げます。御遺歌の中にも、人の死を聞かれますとすぐ年齢に目をそそがれ、或は、天井の節孔をじつと見つめてゐるとか、自分の病の何時なほるかを思ふと悲しい、といふ風なものがありました由、御尤もなことであります。妃殿下の御看護の労をねぎらはれて比翼塚まで遺言遊されたとも承り、恩愛の情まことに切々たるを覚えさせられます。

唯そこまでの御心境にあらせられた[illegible]Fに驚異沙り一[illegible]とといてゐたらく[illegible]すも畏れ多いことながら、あまりひどいたはしさに、さう言ふことを想はずに居られませぬ。

それにつけましても御縁といふことを遠くばるかに我身に味はされることであります。太陽に達することは如何なる人力を以てしても不可能であります。唯佛陀の光が我等に燦々と注がれるばかりであります。よき師とよき教は太陽の光線の如き働きをして下さることであります。

○

△「大無量寿経講話」はすでに二年に亘りまして福島先生が隔月当会館で引き続きお話下さいました筆録であります。惜しむらくは私の無力さの悲しさに香り高い御言葉の氣品のほとんどを筆記しつくせませず、皆様にお伝へ出来ないことであります。先生の御身続下さいました御講話は、他で聞くことの出来ぬ法味豊かな、佛意昭々たるものを感じます。何卒言外に溢れます法味を御汲み取り下さるやうお願ひ申します。

巷間に沢山出て居ります唯文字だけの解釈ではありませぬ、生きたひかりにかがよふものであります。私は先生の御講話を縁といたしまして始めて大経上巻が生きた文字として拝読させて頂け始めました、御読み下されば御同感下さることと[illegible]

△「佛智をたまはりて」は最近非常に心打たれて居りますことどもであります。佛智ひとたび徹するところ、文字通り、一文不知の愚者といふことが照し出されることで、愕然とする外はありませぬ。佛智は念佛であり即名号であります

盤珪禪師は「ひよつこり不生といふことがわかり、それ一つで萬事がととのひ、今迄無駄骨を折つた、前の非がわかりましたわいの」と申され、七十二歳の入滅まで「佛心不生」を説きに説いてつきぬものがあつたと承ります。佛智を頂くひとつに、一切無明が破られて參り、佛智の働きひとつが無限のひかりとなつて下さる「現生に無量の德」を頂くことであります。

△「随想断片」は最近の日常に感じましたことどもを誌しました。断片でありますが、私には日常におこる不思議な味ひであります。取捨御自由に願ひます。

昭和二十八年二月十五日印刷
昭和二十八年二月十五日発行
毎月一回十五日発行
一部金拾七円（郵税共）
一年金百四円（郵税共）

名古屋市南区駅上町二ノ二八
編集兼発行人　花田正夫
名古屋市千種区千種町馬走二八
印刷人　富田肇
名古屋市千種区千種町馬走二八
印刷所　千草印刷所
名古屋市南区駅上町二ノ二八
発行所　慈光社
振替口座番号　名古屋一〇四七〇番